

エルドマン「再生の心理學」に就いて

大 脇 義 一

私が曾て本誌第六十五號に於て思惟の心理學的研究の大體の傾向を述べた時に到達したかと思はれる結論は、要するに思惟現象を尋ねて行けば結局表象の問題にもどつて來ざるを得ない。言はゞ思惟研究の門を開くには表象の鍵を以てするの外はない。少くとも表象といふものをどう始末するかに依つて思惟過程の説明は如何様にもなり得るといふにあつた。かう考へて來ると心理學上に於ける表象の問題は古くして而も常に新しい意味を持つて居るとも言ひ得るであらう。近頃手にしたエルドマン氏の「再生の心理學」B. Erdmann, Grundzüge der Reproduktions-Psychologie. 1920. を讀んだのも一はかうした興味からである。

エルドマン氏と言へば誰しも想ひ起すのは、ドットの協力に成る讀字の實驗的研究である。其外に猶ほ彼は心身の關係を論じたものや、思考と言語に就いての著作や論理學に關する書などがありもう可なりの年輩の人であらうと思はれる。此等の述作に依つて推し測られないことはないが彼の傾向を最もよく語つてゐるのは此の「再生の心理學」の結論の所で書かれた彼自身の告白である。

其に依ると彼は何れの感官に於ても知覺分析は決して鋭敏であるとは言へない。従つて感覺の記憶はよい方ではなく、外部刺激を受けてかゝる記憶に注意を容易く集中するといふことは難しい。就中特に甚だしいのは聽覺の記憶である。覺醒時に

於て色彩の想起、想像及び抽象表象は極く稀にしか現はれない。唯だ無意識的又は夢の中に於ては容易く見られる。その場合には聽覺的表象すら加つて幻覺に近い位の鮮かさで浮び出るのである之に反して早くから且つ強く發達したのは言語の聽覺的記憶であつて其には弱い運動感覺的附加物も交つてゐる。であるから彼の思惟は特に言語的である。たとへ直覺的に呼び起された場合でも稍もすれば言語的となるのである。

此の如く外界の捕捉に就ては不利益であるから彼は自ら自己觀察に興味を傾けたと言つてゐる。感情的の調子外れに陥ることよりも知らず知らず表象の經過に注意が向けられることが屢々である思慮を要する仕事に注意を向けるが爲に特に其の練習をするといふ様な必要は決して無かつたと述べてゐる。こうした性向を持つ彼が「再生の心理學」を語ることは決して不自然では無い。

「再生の心理學」換言すれば「再生表象の心理學」は何を以て職分となすものであるか。彼は之に答へるに先だつて先づ再生の語義を明にしてゐる。

一體、聯合 Association の 再生 Reproduktion のいふ語は今日でも猶ほ種々の意味で極く廣く用ひられてゐるのであるが通常意味されてゐる範圍で之を別つとすれば、聯合とは意識内容の個々別々に得られたる連結、並に此の如き連結に導く過程を意味してゐるが、之に對して「再生」とは現在與へられてゐる意識内容と聯合的關係にある過去の意識内容が此の關係に應じて新しく識闘上に高揚される過程である。之が一般に解せられてゐる處であるが、かゝる從來の意味はエルドマンに言はせると何れも擴張する必要がある。

元來、再生といふことは事實としては既に心理學以前の知識にも見出されるのであるが、聯合といふ命名と相合して元理的の意味を有するに至つ

たのは十八世紀の經驗的心理學、就中、バークレー及びトーマス、ブラウンの暗示の説、並びにハートレー、ヒューム、ゼームス、ミル等の所謂聯合心理學にその端を發する。他方再生の分析は、ヘルバルトの表象過程に就いての經驗的基礎づけ及び數學的取扱に依つて特種の意味を帯びて來た。然しロツツエ、ヘルムホルツ、フェヒネル以來の現代心理學に於ては再生の構成及び機能、就中、想起及び記憶研究に就いて非常な意見の相違がある。

そこで先づ吾々の論を進めるに當つて誰にも明かな事實より出發するとすれば、一般に吾々が繰返しなす運動は絶えず容易に、迅速に、而して確實に行はるゝに至り、もとは學習に困難を感じた有意的の運動が遂には無意識に機械的に爲されるのである。かゝる現象、換言すれば慣習とか練習とかいふ事實は必ずしも反應運動のみに限つたことでは無いのであつて其の反應運動の基礎をなす

ものとも言ふべき感官知覺を自身の範圍に於ても行はれてゐる。吾々が繰返し知覺するに慣れた對象は容易に迅速に明瞭に確實に而してより直接に認知される。今、かゝる知覺的記憶を一般に知的記憶と呼んで之を運動記憶と相對立せしめることとする。唯だこゝに注意すべきことは此等過去の經驗の殘基は必ずしも全然生理的のものではないといふことである。

更に猶ほ之に似たる現象、慣習の效果ともいふべきものを探すとすれば感情の方面にも見出さるゝのであつて感情記憶とも云ふべきものを假定することが出来る。度々自分に經驗する氣分や情緒や意志の興奮は迅く起り確實に現はれ而も現はれ易くなる。之に就いて倫理學や教育學の方面で古來から認められてゐる「意志の記憶」といふことも考へられるであらう。

併し之より以上猶ほ一步進んで記憶の假説に就

いてまで立入ることは出来ない。其は一般に生物學の方面に於て多くの意味を有することであつて記憶を種族遺傳の事實よりして意味づけて行き、其より遺傳によつて獲得せられた性質を尋ねるのであるが吾々にとつては此の「種族の記憶」は唯だ豫造された聯合條件を假定する場合にのみ觸るべき問題である。もつと進んでは敏感なるヘリングの觀察即ち有機體の一般的機能としての記憶論がある。此處まで來ればもう一步で活力論 Vitalism の反對者となり、又無機物と有機體との間に特別の區分を設けること、反對者となり、有機體の記憶作用の比類を無機界に於ける週期的の現象に擴張せんとするに至るであらう。唯だこゝに忘るべからざること、は斯様に記憶の意味を擴張して行くに従つて、其だけ比類の結果が不確實となり、前提其自身が既に比類の結果たるの觀あることである。言ひ換へれば此の如く進み行けば遂には吾々

に知られないものを其よりも猶ほ一層知られないものに依つて説明するが如き危險に陥るのである。そこで吾々は前述の慣習の效果だけに停らむとするのであつて其結果、全て記憶説の公準を次の如く定めむとするのである。あらゆる知的及び感情的意識内容及び之と函數的に連關する反應運動の全てはその頻數竝に滲透(強度、感情價、注意)の度に應じて自己の痕跡を聯合的關係中に殘留する。其を再び聯合的關係が呼び起すのである。此の公準は一見從來の主張と全然一致して居るかの如く思はれるが然し實は次の様な諸點に於て其と大に趣を異にするものがある。

第一、聯合的結合と其に制約されてゐる再生とは元理上、區別さるべきものであること、第二、に其は必ずしも個々に得られたる記憶に限られないこと、何となれば其は第一次的の豫造されたる聯合を暗黙の中に含んで居り、記憶の中に無意識

的に存続する殘基の連絡を要求して居る。第三に全て再生は豫造された、又は既に得られた聯合に依つて全然制約されてゐるとは言へないこと、第四に聯合的又は其他の傾向ある再生を引放す條件は全然現在の興へられてゐる意識内容（英國聯合心理學の印象觀念）だけに限るとは言へないこと、猶ほ又、再生されるものは必ずしも意識内容として現はれるとは限らないこと等である。

以上の諸點を明かにすることを以てエルドマンは自己の所謂再生の心理學の職分となして居る。其の中でも特に重要なのは第三の點であつて聯合的再生を理解するには他の、是迄充分明かにされて居らない様な種類の再生を豫想せねばならぬといふことである。

此等のことを論ずるに先だつて豫め了解して置かねばならないことを吾々は一般の認知作用の第一に數へられる所の感官知覺は其の伴ふ表示の型

エルドマン「再生の心理學」に就いて

に依り二種類に分たれたるといふことである。その第一は現在の感官刺激に依つて興へられてゐる知覺内容が記憶の助けによりて補充されて居る場合である。之を補充されたる知覺と呼ぶ。補充された知覺の容易く見出される例は何等かの表象の形に於ける記憶の補助である。之をエルドマンは表象的に補充された知覺 *repräsential ergänzte Wahrnehmung* と名けてゐる。例へば人の足音を聞いてその人の個々の視覺的特徴の表象を想ひ浮べて以て之をその友人の足音なりと認知する。處が時としては熟知した對象を知覺して之を認知する際にその意識構成がかうした記憶表象による補充を全く缺如せる場合がある。之を彼は表象的に補充されない知覺 *repräsential unergänzte wahrnehmen* といふと呼ぶのである。

吾々の興味は此處に於て必然的に此の表象的に補充されない知覺に注がれざるを得ぬ。

先づ其は如何なる場合に經驗されるのであるか
 エルドマンに依ると其には二箇の條件が協同する
 を要する。第一、全然熟知した對象が熟知した環
 境の中に存在せねばならぬ。そして第二に、その
 知覺は極めて短時間に經過せねばならぬ。此の際
 に吾々は猶ほ二つの群を區別し得るのであつて上
 記の條件の下に於ても、眼前の知覺構成に對して
 知覺が注意をよく集中してなされた場合と、然ら
 ずして瞬間的の知覺が興味ของ如き感情要素を少し
 も伴はず、不注意に行はれた場合と此の何れに於
 ても表象的に補充されない知覺が現はれるのであ
 る。其は前者に以ては眼前の知覺構成に對して注
 意を集中する結果、全ての記憶表象的な補充が禁
 止されるのであるし、後者に於ては全然注意を缺
 いて居ることが表象的な補充を許さないのである
 (知覺時間の短きこと、並びに對象を充分熟知し
 て居るといふことを假定しても) 言はば前者は注

意の積極的な禁止作用であり、後者は消極的の禁
 止作用である。

表象的に補充されない知覺を實驗的に研究する
 には瞬間露出器 "Fachioscope" に優れるは無い。
 其は最もよく上述の二箇の條件に適してゐるから
 である。今、全ての實驗の時間を用意の合圖から
 刺激露出までと、露出の瞬間と、刺激消失後、被
 驗者の報告迄の三期に分けて考へるとすれば、第
 一期に於ては、注意による豫期の緊張こそあれ、
 視覺的、聽覺的又は運動感覺的の記憶表象、文字
 の意味内容の如きものは無論現はれないけれども
 第二期に入つてもやはり全く同様であつて刺激が
 露出された時に吾々は露出面の知覺構成だけに止
 つてゐる。その知覺は直接認知であつて其の内容
 の表象とか音讀の再生とかは全然缺けてゐる。
 此等のものは第三期に入つて始めて現はれるので
 ある。即ち、刺激が消失してから被驗者が反應す

るその間に始めて（記憶）表象的に補充されたるものとして經驗されるのである。

要するに發達したる意識に於ては熟知した對象の、表象的に補充されない知覺が事實存在するといふことは明かである。さりながら進んでかゝる知覺の認知構成を精密に考查し、其上にその可能な條件に就いての假説を導き出すに先だつて此の事實とは一見矛盾するが如く思はれる議論を考察して置かねばならぬ。

第一こゝには所謂「表象的に補充されない」と名けられた知覺の認知は近頃よく言はれる「どこかに覺えのあるといふ感じ」*Bekanntheitsqualität* od *Bekanntheitsgefühl* に固有なるものではないか。即ち知覺した對象がどこかに見覺えのある、熟知したものであるとの意識ではないかと。

なるほど熟知した又は多少經驗したことのあるものを知覺する場合にはかゝる意識を持つといふ

ヘルドマン「再生の心理學」に就いて

ことは誰も疑ふことは出来ない。然し乍らこゝに考へねばならないことは、吾々が一般に珍しい意外な對象を豫期せずして知覺した場合には必ず「見慣れない感じ」*Fremdheitsbewusstsein* ともいふべきものを經驗するが其と違つて「どこかに覺えのあるといふ感じ」はいつも必ず經驗されるとは限らない。再認といふ意味の認知作用である場合に於ては無論必ず經驗されるのであるが然らざる場合特に先に述べた様な條件の下に於ては之を缺いて居るのである。即ち強き注意の緊張のある場合、又は瞬間的の興味なき知覺に於てはかゝる感じを伴はない。してみると「表象的に捕捉されない知覺」と「覺えのあるといふ感じ」との間に別を認めねばならないのである。

第二の非難といふのは「表象的に補充されない」といふれどもその表象的補充といふものは其が如何に微弱にして瞬間的であつたとしても従つて

注意が及ばなかつたとしても必ずや下意識の中に發見されるに相違ない。であるから全然表象的に捕捉されない知覺といふが如きものは無いといふにある。

之に就いて考ふべきことは知覺作用には實際無意識の内容の至つて多いといふことである。而して如何に老練な内省と緻密な注意とを以てしてもかゝる微弱な意識内容を明確に捕捉することは不可能な場合があるといふことである。そこで一般に意識内容を分析するに就いての約束といふが如きものを設けることの必要が起る。即ち幾ら周到な注意を以てしても猶ほ捕え得ざるが如き内容は最早意識の一部分として考へることは出來ぬものであるといふことに定めねばならない。自己觀察に此の如き標準を設けて置くことは實際必要なことである。そして又實際に於て暗々裡に之が豫想されてゐるのである。そこで今吾々が意識内容の

分析に當つて此の約束に従ふとすれば、吾々はどうしても「表象的に補充されない知覺」が存在することを認めなければならぬのである。従つて第二の非難も亦、當を得たるものでないことを知るのである。

さて此の「表象的に補充されない知覺」の性質を一言にして言へば其は直接な、同時的な具象的な明晰なそして狹義の對象的な知覺認知の總體である。先づ其は二つの點から直接の知覺認知なりと言ひ得る。即ち一方に於ては過去の同種の知覺の全ての事物的表象を缺いて居る。豊かな以前の知覺構成も抽象的な普遍又は個物表象をも持たない。又他方に於てはたとへ如何なる種類の意識内に屬してゐるとしても局處徵驗の全ての表象を缺いてゐることである。

次に「記憶表象に補充されないで知覺」されたる認知が具象的又は直覺的であるといふ所以は知覺

された對象を言ひ現はす言語も無く従つて命題又は命題語としての判断といふものが見出されないからである。

第三に認知内容は如何なる部分も悉く始から一様に明晰であつて、より以上明晰にせんとする衝動は見出されない。

更に「表象的に補足されない知覺」は對象的である。單なる所與である。熟知した知覺内容は空間的外界の一部として「宛もピストルから發射せられた」かの如くに立つてゐる。唯だ單にそこに立つてゐる。その場所に、そうした有様で。知覺主觀に對する關係は何等表示されることなしに唯だそこに立つてゐる。主觀なき客觀は不可能であるといふことは認識論上から言へば無論正しいことであるが心理學上から言へば必ずしも正當ではないと言ひ得る。

「表象的に補足されてゐない知覺」はかゝる性質

を持つてゐるものである。エルドマンは猶ほ進んで聯合的再生と統覺的再生とを論じて遂に此の補充されない知覺を統覺的再生又は融合的再生に歸して居る。

「再生の心理學」の以下六章に渡つて述べられたのは「表象的に補充されたる知覺」に就いて、あつて其はこゝに一々紹介するの要を認めない。唯だエルドマンは最後に言つてゐる。再生過程の再生的要素は必ずしも意識的でない。根本的形式に於て其は無意識的な刺激組成である、而してその發生には何等聯合的關係は見出されないのである。而して彼は發生的方面から考へて再生の最も重要なものはあらゆる種類の感官及び自己知覺に於ける統覺的融合であるとなした。從來意味されてゐる、再生とその趣を異にせる點に就いてエルドマンの勞を認めなければならぬ。

エルドマンの所説は上述の如く珍しいとも又、

新しいとも言ふことは出来ないであらう。然し彼が「補足されない知覺」を説いた處に吾々は少なからぬ興味を覺えるのである。エルドマン自身は自己の立場よりしてキェルペ、マルベ一派の思惟心理學を批評する暇を有しないことを悲んでゐるが吾々は既に凡そエルドマンの態度といふものを窺ふことが出来る様に思ふのである。が然し其に就いての論評は稿を改めて別に述べ度いと思つてゐる。

(一一・四・一〇)

彙報

大正十一年度京大哲學科講義題目

正科目

哲學

- 普通 西山 2 哲學 概論
 特殊 西山 2 ヘーゲルの論理學
 演習 西山 2 Hegel, Phänomenologie des Geistes.

西洋哲學史

- 普通 朝永 4 西洋哲學史
 特殊 朝永 2 1 ヒュームよりカントまでの哲學
 2 ヘーゲル後の哲學
 講讀 朝永 2 Kant, Kritik der reinen Vernunft.

印度哲學史

- 普通 松本 2 印度哲學
 齋藤 2 佛敎敎理概論
 特殊 松本 2 印度佛敎史
 演習 松本 2 華嚴五敎章